

台湾における『剪燈新話』研究の概要（1980—2010）及び本研究の方向性

報告者：許麗芳（台湾彰化師範大学国文学科）

日本東京外語大學 2010.11.12

一、台湾における研究概要：台湾地域外における漢文小説との比較を通して

ここ三十年間（1980—2010）、台湾における『剪燈新話』を中心とする研究は主に明清伝奇（文言）小説または日本漢文小説についての考察が試みられている。

1980年から2010年まで約三十年間にわたり、¹出版物の収集をはじめ、定期刊行物や学位論文の編纂、シンポジウムの開催など類似した研究が行われている。これらは、書版の校正、伝播の影響、相違点の比較という三つの方向に集約される。つまり、『剪燈新話』の中国語版、日本語版、韓国語版やそれらの注釈、『剪燈新話』が日本と韓国、ベトナムに伝わった歴史的過程、それに関する影響と変容、ならびに書き換えられたことによる文化的交流や文学の伝播についてなどである。

これら比較文学の研究は主に中国語科と日本語科の大学院で行われており、特に金時習（1435—93年）の『金鰲新話』（約1466—72年）、日本の浅井了意（1612—91年）の『伽婢子』（1666年）、上田秋成（1734—1809年）の『雨月物語』（1768年）及びベトナムのNguyen Du（阮嶼）の『伝奇漫録』が注目されているが、実際の研究内容は『剪燈新話』の日本、韓国、ベトナムでの発展

¹ 陳益源「臺灣對於越南、日本漢文小説的整理與研究」（『外遇中國——「中國域外漢文小説國際學術研討會」論文集』、台湾：学生書局、2001年10月初版。台湾早期に類似漢文化を専攻した研究者、現台湾師範大学朱雲影教授の著書には『中國文化對日韓越的影響』（台北：黎明文化事業有限公司、1981）がある。その後、日本漢文小説に関する研究には2002年に出版された『日本漢文小説叢刊』のほかに、シンポジウムも行われている。1986年から、台湾聯合報文化基金会国文学文献館が八回にわたり中国域外漢籍国際シンポジウムが開催され、論文集が出版されている。1988年中国古典文学研究会を主催した第九回中国古典文学會議では、域外漢文小説がテーマとされ、『域外漢文小説論究』（台北学生書局 1989）が纏められている。1999年に東呉大学中国語科において域外漢文小説国際シンポジウムも開催されている。さらに、2001年中正大学において中国域外漢文小説国際シンポジウムが開催され、『外遇中国——「中国域外漢文小説國際シンポジウム」論文集』（台湾：学生書局2010年10月）が出版されており、張孝鉉の「韓國漢文小説研究的成果和現況」、王國良の「韓國漢文小説的搜集與整理」、内山知也の「有關在日本的漢文小説研究之情況」、崔溶澈の「新發現的『金鰲新話』朝鮮刻本」等が収録されている。

と影響の過程についての説明、または特定の物語の題材と『剪燈新話』の特定の文章の比較—例えばストーリーの変更とテキストの特徴についての考察—これらにより、中日韓越間の伝奇小説と互いの文化交流や影響の過程を強調したりするものである。

言語間の相違、互いの時間的空間的距離や関連文献が手に入れ難いことから、特定の研究者に所蔵されたまま、広く伝えられないこともある。研究の多くはテキストの考証と細部にわたる比較に集中しているが、将来的にこれらの授受、リライトの創作をより広く、さらに深く分析する試みが期待される。さらに文学や文化の価値感などに着目し、研究の共有と研究成果を多元的に広めることが期待される。

二、本研究の考察：受容理論の総体的考察

これらの模倣、創造について総体的に考察したいと思う。特定の小説テキスト以外に、外在する文学的な要素も入れて考えなければならない。これらの現象は総体的にテキストを考察する上で併せて考えるべき事柄だからである。

(一) 考察の基礎：

比較文学における受容理論を中心に考えると、受容者側が外国文学からエッセンスを吸い取り自分の創作に取り入れる行為は影響と伝播につながる。

(二) 注目点

伝奇文体の内容、序跋や評語への注目、作家の心理と形式意識の伝承である。『金鰲新話』、『伽婢子』、『雨月物語』の『剪燈新話』に対する模倣の研究において、これらの模倣がどの程度中国文学的思考や基調を意識して表現されているのかに注目し、また、総体的な模倣の在り方にも注目して、その中に込められている思想的内在について検討する。

三、実際の研究方向：個別作品の微視的分析

本研究では、作者の記述に対する意識に注目している。異なる時代の作者が、ある種の価値感またはモデルを認識し、ある種の思想を含んだ記述スタイルが形成されると考える。このような研究の方向性は、一部の作品を取り上げてスタイルの特徴を分析するだけでは不足している点を補足することができるであろう。主に次の二つの方向が挙げられる。

(一) 伝奇文体の詩的記述：フィクションにおける想像と精神世界における寄託

金時習の『金鰲新話』、浅井了意と上田秋成の『剪燈新話』（牡丹灯記）に対する翻訳やリライトを例に挙げると、瞿佑の原文にはそれほど多くの解釈がされていないが、それに対し、『伽婢子』や『雨月物語』では、鬼、凄まじさや美しさが強調され、日本の作者の個性が表れている。しかし私の考えでは、瞿

佑は小説の中で特別な主張こそしていないが、彼の記述自体が意味のあるものであり、即ち伝奇小説の鬼神に作家の心理を託し、婉曲的に思想を反映させるという特質を持ち、奇をてらった作風、生き生きとした描写で、単なる因果や鬼神の物語とは異なっている。²また金時習の『金鰲新話』の最後に「矮玉青氈暖有餘，滿窗梅影月明初。挑燈永夜焚香坐，閒著人間不見書。玉堂揮翰已無心，端坐松窗夜正深。香罈銅瓶烏几淨，風流奇話細搜尋。」と述べられている。これはこれらの小説の作者が、『剪燈新話』ないし中国文人の固有の記述意識に注目していることを物語っている。しかも、話に登場する主人公は作家である場合が多く、筋も作家の心の投射の場合が多く見られる。例えば、期待される感情や教養の表明など、これらは奇想天外な物語としてではなく、すべて作者自身の想像と期待を表しているのである。幽霊は、実は作者自身の才覚を表現し、心理の寄託を意味するものである。これらの現象は叙述テキストへの想像と癒しの特質を反映している。

作者が事物に感じて悟りがあるからこそ、作品に生命が与えられ、特に伝奇小説の抒情性は顕在化する。例えば、桂衡が『剪燈新話』の序文に「世間萬事幻泡耳，往往有情能不死」と述べているように感情は作品生命の所在であり、作者個人の心理の表現でもある。³しかし表現の方式は往往にして叙事の中のフィクションとして現れ、幽霊の描写を通して、より自由的に想像と虚構が描かれ、作者の主体性と感情もいっそう表現される。小説は、因果応報、勸善懲悪の教訓と幽霊の絶妙な美しさを、⁴幾層にも織りなす思考の本質にまで到達し、事実を越えて、より虚構の内在となり、怪奇を示すための怪奇ではなく、より多層多元的な認識を内包するようになる。⁵

ここに至って、これらの小説はただ『剪燈新話』の形式を模倣し、或は題材

²例えば洪邁《容齋隨筆》によると、「唐人小説，不可不熟，小小情事，凄惋欲絶，洵有神遇而不自知者，與詩律可稱一代之奇。……大率唐人多工詩，雖小説戲劇，鬼物假托，莫不宛轉有思致，不必專門名家而後可稱也」という。胡應麟が『少室山房筆叢』三十六にも、「變異之談，盛於六朝，然多是傳錄舛訛，未必盡幻設語，至唐人乃作意好奇，假小説以寄筆端」と述べている。伝奇小説の想像又は誇張などの修辞傾向が意識されている。魯迅は『中國小説史略』第八篇「唐之傳奇文」（上）では、「唐傳奇之異於志怪，乃在於胡應麟所謂『作意』與『幻設』，即意識之創造，是以前施之藻繪，擴其波瀾，故其成就乃特異，其間雖亦託諷喻以抒牢愁，談禍福以寓懲勸，而大歸則究在文采與臆想，與昔之傳鬼神明因果而外無他意者，甚異其趣矣」と述べ、伝奇小説の創作自覚と作品の芸術特質を強調している。

³ 韓進廉「小説繁榮期的建樹」『小説美學史』，pp124-125。

⁴例えば王三慶は「日本漢文小説研究初稿」において、日本漢文小説の創作動機について遊戯、社会風紀の改造と漢語の学びの三種類を指摘している。

⁵喬炳南「剪燈新話對日本江戸文學的影響」、『古典文學』第七期，1985，p794，山口剛の「怪異小説研究」を引用し、江戸時代の怪異小説は、《伽婢子》が始まる以前、で怪異小説が存在したが、これらの小説は因果、懺悔を主として……《伽婢子》があるからこそ、因果応報とは異なり、怪異のための怪異の独立性が守られている。

を加えてリライトするだけではなく、これらの文体を記述する心理的内在をも踏襲したことになる。記述する際に、物語の陳述、筋の説明だけでなく、さらに修辞・叙事の中に作家の内在的価値観及び人生の夢・期待などの特質を付け加えている。例えば、雲樵が『伽婢子』について「言辭之藻麗也，吟詠之繁華也」と語っている。上田秋成は、『雨月物語』の序文に「揜晬逼真，低昂宛轉、有鼓腹之閑話，衝口吐出」と述べている。作者（浅井了意、上田秋成ともに）は誇張をできるだけ避けて、内的夢と幻想を説明し、記述と表現の自らの求めを実現し、そのことにより、個人的な抑圧や抑鬱を表現する。叙述テキストを通して、抒情的心理が表現され、現実の世界に対するあり方と主張だけでなく、感情と欲望も表現されることにより、叙事テキストは、伝奇小説の作者が幽霊を描写する特殊な心理の内在になる。従って、浅井了意或いは上田秋成は、『剪燈新話』を翻案、リライト或は消化⁶というより、むしろ伝奇小説の詩的心理を発揚し、瞿佑が『剪燈新話』を書いたように、幽霊の描写を通じて抒情を生み、癒しを与えていることになる。

(二)漢学文体の多元的対話：縦の踏襲と横の交流

本研究では、これらの伝奇小説の序跋や評語にも注目する。これらの原作者自身と各々の時代の作家たちによって書かれた言葉は、往々にして才覚や自己表現を強調している。つまり、伝奇小説を創作することにより抑鬱された総体的意識を緩和している。韓国の金時習、日本の浅井了意や上田秋成は、小説の中だけでなく、序文・跋文の部分でも『剪燈新話』（牡丹灯記）の多くを改編している。例えば、上田秋成の序文と『雨月物語』の書名の淵源、浅井了意の『伽婢子』の序文の内容などにおいては、全て瞿佑の『剪燈新話』（牡丹灯記）と『剪燈新話』の序文の理解と模倣が見られ、その中の語彙やフレーズばかりでなく、故事や内在心理モデルをも踏襲している。⁷『伽婢子』と『雨月物語』

⁶ 喬光輝，「『剪燈新話』與『雨月物語』之比較：兼論『牡丹燈籠』現象」，張伯偉編，『域外漢籍研究學刊』第三輯（北京：中華書局，2007），頁334。

⁷ 瞿佑は『剪燈新話』の創作を論じた時，「《詩》、《書》、《易》、《春秋》，皆聖筆之所述作，以爲萬世大經大法者也；然而《易》言：龍戰於野，《書》曰：雉鳴於鼎，《國風》曲淫奔之詩，《春秋》紀亂賊之事，是又不可以執一論也。今余此編，雖於世教民彝莫之或補，而勸善懲惡，哀窮悼屈，其亦庶乎言者無罪，聞者足以戒之一義云爾」と述べ、勸善懲惡の意識を持ちながらも「哀窮悼屈」は実は文人の抒情の特質を強調し、創作を借り抑鬱を晴らし、作者の人格価値を発揚し、感情を寄託する。一方、雲樵は《伽婢子》の序に，「『伽婢子』，松雲處士之所著也，凡若干卷。蓋言神怪奇異之事，言辭之藻麗也，吟詠之繁華也，膾炙人口者，不可勝焉。《論語》說曰，子不語怪神矣。茲書之作，不免懷詐欺人之謗乎？云：『不然。……『伽婢子』之爲書，言擲新奇，義極淺近，怪異之驚耳。滑稽之說，人寤寐之醒焉。倦得之舒焉。……是庸人孺子之好讀易解也，如言男女淫奔乃欲深誠，幽明神怪，則欲覈理，雖非君子達道之事，願欲便庸人孺子

の序文での中国経典と文化や心理の踏襲ばかりでなく、日本と韓国の学者の『金鰲新話』の評語、序文・跋文も中国文学史の典故、フレーズ、イメージ、伝統的故実と伝奇小説の相互融合を表し、全体の文章をより豊富かつ深刻な文学的イメージを伝え、読者に上下古今を味わせ、体系的に理解させ、文学史の典故あるいは文学のキーワードの踏襲だけではなく、より作品における語彙の中に内包された心理と含蓄を示し、作品により多面的かつ深い芸術的要素を備えて、伝奇小説の作家的、詩的な性格を強めた。これらの言葉を分析することにより、作者あるいは評者のモチベーションを理解することができる。その内容は往々にして、『詩経』、『左伝』、『楚辞』、『論語』などの文章の吸収と解釈、ある程度の漢学教養、伝奇小説など中国文学と伝統思想の帰納、中国伝統との対話、道德貞操と詩学伝統等を含む文人の趣、及び文学特質と理想、夢など価値観の相互対話になっている。

一方、作者が序文・跋文、評語、解釈を書くと同時に、それ自体は中国的記述方式の模倣であるが、序文を書くという点からいえば、記述形式は意識された模倣であるが、その中で、小説の内容、創作背景が説明され、中国経伝が引用され、または、中国の伝統的道德規範または価値感・精神までもが説明されている。その一方で、新しいテキスト、小説を参照しながら、伝奇小説の記述の意義を拡大、深化させている。これらの作者は、中国の文学的背景を踏襲しているものである。『剪燈新話』に対する模倣というより、むしろ中国史学と詩学伝統ないし伝奇小説の精神を全体的に受け継いでいると言えるであろう。この点から序文・跋文、評点と注釈を見れば、時代の異なる漢学の対話を経て、上下古今の文献を運用し、規範意識と滑稽の思想を発揮し、中日韓の作家たちの共通の思想や感情と価値観を表した漢学伝統的な交流・対話が見えてくる。

『剪燈新話』の伝播とリライトは、中日韓の文学的交流の特質を持ち、単なる翻訳というものではなく、リライトと条文、また日本人と韓国人学者の評語と注釈が加えられ、これらの小説を漢学の伝統的交流の舞台におしあげている。そこで漢学語彙と意味のコミュニケーションが行われ、また別の中日韓を含める漢学の相互作用のテキストが構成されている。この点も将来、漢文小説の研究の方向として注目されるであろう。

之監感而已』と述べ、正統の経典概念を小説創作をはかり、これらの作品の優美、新奇の特質も言及した。また剪枝畸人は《雨月物語》の序に、「羅子撰『水滸』。而三世生啞兒。紫媛著『源語』。而一旦墮惡趣者。蓋爲業所偪耳。然而觀其文、各各奮奇態、揜擘逼真、低昂宛轉、令讀者心氣洞越也、可見鑑事實於千古焉。余適有鼓腹之閑話、衝口吐出；雉雛龍戰、自以爲杜撰、則摘讀之者、固當不謂信也、豈可求醜脣平鼻之報哉？明和戊子晚春、雨霽月朦朧之夜。窗下編成」と述べた。その中『易』、『書』の「龍戰」「雉鳩」という言葉を引用し、瞿佑の言ったように「雨霽月朦朧之夜、窗下編成」、瞿佑の『牡丹燈記』の「雲霧之晝、月黑之宵」と判詞「天陰雨溫之夜、月落參橫之晨」から受け継いできたと思われる。